

# 『私の杯は あふれています』

(詩篇23:1-6)

鮮于 攝

2020.09.06 第1-3 礼拝

@。賛美歌:聖歌404(イエスはなれをよびたもう)、新聖歌197(祈りの園生を)

## @。序言

お早うございます。私は、先月の23日、協力宣教師として仕えることになりました鮮于です。こんなにも早く、神様と皆様の前で、証しを兼ねて、神様のみ言葉を共に分かち合う機会を頂きました。大変未熟な者にこの様なみ恵みが与えられ、光栄であるとともに、感謝しております。今日、私のごく普通な、また恥ずかしい信仰告白ではありますが、皆様と分かち合いたいみ言葉は、詩篇23篇です。私は、この個所から、証しのタイトルを、『私の杯はあふれています』と致しました。願わくは、この場に、神様の豊かな油注ぎが現れ、私たちをみ恵の中でここまでお導いて下さった、神様の豊かな憐れみに感謝しながら、御名が褒め称えられる礼拝になることを祈ります。聖書をお読みします。

(P21) (23:1) 主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。(23:2) 主は私を緑の牧場に伏させ いこいのみぎわに伴われます。(23:3) 主は私のたましいを生き返らせ 御名のゆえに 私を義の道に導かれます。

(P22) (23:4) たとえ 死の陰の谷を歩むとしても 私はわざわざを恐れません。あなたが ともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖 それが私の慰めです。

(P23) (23:5) 私の敵をよそに あなたは私の前に食卓を整え 頭に香油を注いでくださいます。私の杯は あふれています。(23:6) まことに 私のいのちの日の限り いくつしみと恵みが 私を追って来るでしょう。私はいつまでも 主の家に住みます。アーメン

ご存じのように、詩篇23篇は、イスラエルのダビデ王が、恐らく、様々な喜びと苦難を重ね歩んで来た人生の夕暮れの時に、自分の生涯を振り替える中で、天の父なる神様から頂いた数え切れない御恵みに感謝する賛美であると思われます。詩篇23篇は、そのような背景から、大勢のクリスチャン達に暗唱されている箇所でもあります。

## @。本論A

聖書に登場する2,930人の人物の中で、ダビデ王のような波乱万丈の人生を過ごした人物も多くありません。(P24) ダビデ王は、ベツレヘム人エッサイの8番目の末子で、家の中では羊の番をしていました。ダビデは15歳の時、神様のお導きによって預言者サムエルから、油を注がれ、将来に、イスラエルの王となることを知らされました。そして、(P25) 20歳の時には、恐ろしいペリシテ人の戦士である、巨人ゴリヤテとの戦いで、(P26) (サムエル記 第一17:45)に出てくる、あの有名な言葉、即ち、” おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそいったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によ

って、おまえに立ち向かう”と言み言葉で勝利を得ました。このことで、サウル王を始めに、イスラエルの民を驚かせました。そして、イスラエルの女たちは、(サムエル記 第一18:7)にあるように、(P27) ”サウルは千を討ち、ダビデは万を討った”と歌い交わしました。一方、サウル王は、この歌を聞いて激しい嫉妬による敵対感に燃え、その後、約10年間、ダビデに対する信頼と共に呪いもしたので、ダビデは寂しい苦難のひと時を送ることになります。結局、神様のお導きによって、35歳になっては、周辺のあらゆる敵を討ち下し、統一イスラエルの王様になります。しかし、60歳には、愛する息子であったアブサロムのクーデターで、王位から逃れて逃げざる負えない困難な立場に陥ったこともありました。そればかりではなく、王座に就いていた40年間の間に、自分の手で神様の栄光が現われる神殿を建設しようと、切に願っておりましたが、その願いは神様に受け入れられませんでした。それで、ダビデは神殿建築に必要な全てを備えたうえで、後継ぎであるソロモンに、一生一大の神殿建設の事業を任せることになりました。この様に、生涯に渡って様々な戦争に対する勝利、また、人間関係における拒絶、反対、怒りによるうつ症状そして、その上、道徳的な失敗などを経験したダビデ王は、人生の夕暮に至るまでも、変わることなく頂いた、神様の凶り知れないみ恵みに感謝して、”私の杯は あふれています”と告白したのだと思われます。

今日、とてつもないことであり、また、大変恐縮であります。勇気を出してダビデが告白した、”私の杯は あふれています”と言うみ言葉を、証しのタイトルとしてお借り致しました。その理由の一つ目は、私が持っている器より、神様から頂いたみ恵みが常に富んでいるためであります。そして、二つ目の理由は、いままで私が行った努力に比べて得た成果が大きかったためであります。さらに三つ目は、”私の杯は あふれています”と言うみ言葉が、今でもそして、これからも続けられることを確信しているためでもあります。これから、大した事もしていない私が、神様のお導きによって、ここまで歩んで来た人生の道のりを、大変恥ずかしい、しかし、感謝の気持ちでご紹介致します。願わくは、この様な者であっても、神様の豊かな憐れみによって、幸せな人生を送ってきたことを、証しすることによって、救い主イエス・キリストに、栄光を捧げたいと思っております。

## @。本論B

私は、生まれてから一年後、母が病気で亡くなり、小学校に入る前までは親と離れ、おばあさんと一緒に田舎で親戚の家をてんとしながら住んでいました。そして、小学校の入学と同時に、ソウルにある実家に戻り再婚した両親、そして、7人の兄弟と共に約9年間生活しながら、生まれて初めて、家の前にあった教会に通いました。小学校の頃には、信仰もないまま、習慣的に主日を迎えたまには、主日献金を神様に捧げずに、秘かにお菓子を買って食べたこともありました。そして、中学校に入っては、部活である野球練習のことで、主日礼拝は、ほぼ3年間守りませんでした。その結果であるかどうか、野球選手としての将来が見えなかったもので、高校で選手生活を辞めて、一般学生として通いました。

中学の3年の時に、両親と下の4人の兄弟は遠い外国に行ってしまう、また、その後、私が結婚して2人3脚になってこんにちに至るまで、私の人生の道のりのともしびはイエス様でありました。中学3年間は、野球一筋であんまり勉強しなかったもので、高校に上がってから、英語のアルファベットから一生懸命に勉強しましたが、成績はそれほど伸びませんでした。しかも、幼い時から片目の視力が弱かったので、兵役はもちろん、海軍に入り船で世界を回りながら生きたいと言う夢も放棄しました。それで、結局、高校を卒業した後、ソウルにあ

る建国大学 (P28) に入って、専攻は体育学としました。高校の時から、かかさず教会には出席していたのですが、信仰は洗礼を受けるまでには至りませんでした。しかし、大学に入って洗礼を受けると共に、校内のクリスチャンサークルに入り、夏休み期間中には2年続けて農村の教会を訪ね、奉仕活動を行いました。そして、大学卒業と同時に、(P29) ソウルにある男子高校の体育教師を3年半やりました。ですが、教師生活が2年過ぎた時から、これから中年になってもグラウンドに立って実技を教えている自分の姿を想像したくありませんでした。それで、教師を辞めて大学の教授になるために、日本への留学を決心しました。しかし、1979年、当時の、韓国は、留学は自由ではありませんでした。従って、まず、パスポートを取るための留学資格試験を受けようと、日本語の塾に通い始めました。そして、1980年、神戸で6か月間のアルバイトをし、学費の一部を貯めてから、筑波大学の研究生として入学するため土浦の地に足を踏み入れたのが、今から丁度40年の前のことでした。

一方、結婚は、ある所で妻と偶然出会い4年間の交際ののち、日本に来る直前の1979年に致しました。そして、結婚十日後には、一人で日本行きの飛行機に乗りました。その後、つくばに着いてからは、研究生、いわゆる学位過程に入るために、主に入学試験を準備する立場で、勉強はもちろん、あまり望ましいことではありませんが、生活のためにつくばの西大通りにあった、サウナ大学、珍来ラーメン屋などでアルバイトをしました。そのためか、来日してからの1年目は早く過ぎさってしまいました。そして、ようやく妻を韓国から招いて、一の矢学生宿舎で待ち望んでいた新婚の留学生生活を始めました (P30)。しかし、妻が到着して間もなく、修士課程の入学試験結果の発表がありました。思いもしなかった結果で、来たばかりの妻につらい思いをさせました。その時、明日から、引き続き私費留学生の生活、それも研究生として、頑張らなければならないと言う事実と直面し、目の前が真っ暗になりました。それで、妻の目を見ることも出来なく、自転車に乗せて、のどにも通らない涙のラーメンを食べたことを、今でも申し上げないと思っています。当然のことと、次の日から私たちは、焼肉屋でのアルバイトを始めました。そして、夜、アルバイトに行く時には、便りのない夫のせいで、妻は私の自転車の後ろで、密かに涙を流した事も沢山あったかと思えます。それから、妻のアルバイト生活は修士課程の2年目に入って、ロータリー米山奨学金と朝鮮奨学金をもらう時までほぼ、2年間続きました。

この時の、信仰生活の拠点は、筑波学園教会でした (P31)。その教会には大勢の韓国留学生在が集い、毎週、聖歌隊に立って賛美し、また、毎年、クリスマス・カンターターを通して信仰の告白と共に、寂しい留学生生活のひと時を喜びで満たしました。いよいよ、修士論文を書き終えた後、神様のお導きで、急に、思いもしなかった嬉しい誘いがありました。それは、体育学で歴史のあるソウルにある慶熙大学で非常勤講師をやってみないかと言う事でありました。それからは、非常勤講師を1学期やっただけで、1984年9月から、31歳の若さで体育科学大学の運動生理学担当の専任講師になることが出来ました (P32)。また、幸いなことに、その年に、一人息子が産まれました。このような出来事は、才能もないばかりではなく、壊れやすくして何処でもある茶碗のような器であった私にとって、まさしく神様からのみ恵みによるものでありました。

専任講師になってからは、留学中に神様に誓願し、祈りの課題であった、教会での奉仕と十一献金そして、クリスチャンサークル作りなどを実践しました。その結果、(P33) 京畿道龍仁にある新葛長老教会で14年間、そして、1998年からは水原セムンアン教会にて6年間、

様々な奉仕ができ、2002年には (P34) 水原セムンアン教会で、長老として奉仕するみ恵みを頂きました。また、賛美を通してキャンパス伝道活動を行うクリスチャンサークルで、GO SPELと言うサークルの指導教授になってから10年目には、3人の卒業生が牧師となり、現在も活躍しています。一方、1990年、勤めていた大学で1年間の休職を頂き、博士課程に入るために日本の文部省奨学生として再び来日し、家族3人と共につくば東京教会 (P35) にて信仰生活をしました。そして、1年間の休職を頂いたので、課程に必要な単位を全部とって、一旦韓国に帰りました。その時、 (P36) つくばにある吾妻幼稚園を一年間通った息子は、カナダでの留学生生活を終えて、今は、36歳になって韓国で就職し、一人で頑張っています。その後、私は一人で、夏と冬休みを利用して合計6年間、日本と韓国を年2回、行き来しながら学位取得を目指して頑張りました。当時、学籍は筑波大に置いたまま、つくばの西大通りにある国立環境研究所の客員研究員として、論文づくりのための実験を行いました。ある時には、6が月間トレーニングさせた動物が全部死ぬなどの幾つかのアクシデントが起こり、がっかりしたこともありました。しかし、私は、 (P37) (イザヤ書41:10) で、イザヤが、バビロン捕囚からイスラエルの回復を預言して” 恐れるな、私はあなたと共にいる。たじろくな。私があなたの神だから。私はあなたを強め、あなたを助け、私の義の右の手で、あなたを守る” というみ言葉を、毎日朝晩、自転車を乗って公園通りを走りながら唱えました。そして、結局、み言葉通りに1998年、修士はもちろん博士号も取って、感謝と喜びに満ちた33年間の幸せな教職生活を送ることができました。そして、その間に、2008年、北京オリンピックの個人種目で、初の金メダル獲得に貢献したことや、多額の研究費を取って、韓国最初の低圧低酸素室を造ったこと、そして、16人の博士と55人の修士を世に出したことは、神様からのみ恵みによるもので、感謝しております。

この様なみ恵みの中で、2007年から引退の後、田舎の廃校を借りて老人ホームを造り、その中に附属の教会を開拓したいと言う、若い時からの老後計画をやめました。その代わりに、3年ほど早く退職し、日本に戻り、自費宣教師として働くことを決心しました。その切っ掛けは、日本での長い留学生活を通して奨学金を始めに、大勢の人々にお世話になったためです。そして、八百万の神への偶像崇拜のために、創造者、救い主でいらっしゃるイエス・キリストの十字架の贖いを信じていない、人々があまりにも多すぎるからでもありました。そして、もう一つの理由は、2006年、1年間の安息年を過ごした鹿児島県鹿屋市に、福音伝道の対象である大学生たちが大勢いること、そして何よりも、1年間、信仰生活を共にしていた、イマヌエル鹿屋キリスト教会に (P38) 、高齢で体の弱い女性牧師と高齢化して弱くなっている信仰共同体が、助けを求めているように見えたからです。それで、帰国後、日本語礼拝部のあるハレルヤ教会で (P39) 10年間、宣教師を目指してトレーニングを受け、50歳以上の引退者に与える、カレブ宣教師になりました。それに、日本に約60人の宣教師を派遣している日本福音宣教会でのトレーニングと手続きの案内をしてもらって、2017年、期待感に溢れて来日しました。最初は、イマヌエル鹿屋キリスト教会で仕える計画で、長年に渡り互いに行き来しながら10年間交わりをしましたが、突然、現地の事情が変わり、別のルートで、 (P40) 稲敷市にある広星キリスト教会に、協力宣教師として着いたのが、今から3年前のことです。そして、期待を持った3年間の主な働きは、路傍伝道や教会の庭管理、牧師と二人で礼拝堂を改築移転したことなど、ほとんど肉体的なことばかりでありました。この3年間は、日本に来る前に持っていた自分なりの宣教計画との大きな隔たりによって、思い煩った時間でした。それゆえ、去る3年間、私が母教会と宣教団体をお願いした執り成しの祈



りは、使徒パウロが、(P41) (ピリピ人への手紙4:6-7) で教えてくれた、”何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもって捧げる祈りと願いことによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます”というみ言葉でした。祈りの中で結局、先が見えなくなり、失敗の気持ちをいただきながら完全に帰国し、韓国での迎える宣教、即ち、最近増えている多文化家族と外国人労働者たちを、教会に導く働きをするつもりでした。しかし、これは、自分だけの計画であったのか、神様は、夢にも思わなかった別の道を開いて下さいました。それも、若い時の懐かしい思い出の多い町にある、土浦めぐみ教会で奉仕できるみ恵みを与えて下さいました。これもまた、”私の杯はあふれています”と言う、私の感謝の信仰の告白が現在にも引き続いている、確かな証拠でもあります。

## @。結論

さて、内村鑑三は、感謝は恵みを受ける器である、そしてこの感謝の器が大きい、また、感謝の多いほど神のみ恵みが多く現われることを告白しました。さらには、感謝は幸福の源であり、幸せは感謝から来る物であると、言っております。その通りに、日常の家庭と働き場において、そして主日の教会において、感謝する信仰者と不平不満を言う信仰者の間には、彼らの顔付きと話し方、賛美の力、み言葉に対する理解度及び実践力などに、その幅と深さが比較できないほどに異なることを、私たちは知っています。そして、イエス・キリストは、感謝する人の側に立っておられることも知っています。それで、(P42-43) レビ人であるアサフは(詩篇50:22-23)で、”神を忘れる者どもよ、さあこのことをよくわきまえよ。そうでないと、わたしはおまえたちを引き裂き、救い出す者もいなくなる。感謝のいけにえを捧げる者は、わたしをあがめる。自分の道を正しくする人に、わたしは神の救いを見せる”と、信仰者が捧げる真の礼拝が何であるかを賛美しています。

一方、大抵の人々が歩む道は、大きく二つに分けられると思われれます。一つは、狭い道、もう一つは、広い道であります。イエス様は、(P44-45) (マタイの福音書7:13-14)で、”狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者は多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです”とおっしゃいました。多分、大勢の人々は、年齢と環境に関わりなく通りやすい広い道を選んで、一回きりの人生を楽しみながら死に向かっていると思われれます。特に、韓国の場合には、60代の少し余裕のある引退者の大部分は、楽しい人生を目標とし、今まで出来なかった趣味活動に励んでいるように見えます。そして、70代に入ると、本教会のモーセ会会報、9月号の特集テーマにも示されているように、”死への備え”をするのが普通の生き方であると思われれます。しかし、イエス様の十字架の贖いを抱えている信仰者は、(P46-47) (ローマ人への手紙12:1-2)で、使徒パウロが告白したように“あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として捧げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれる、完全であるのかを見分けるようになります”と言う、み言葉を噛みしめながら、残された少ない時間を感謝の源でいらっしゃる神様に捧げるために、頑張っていられらると確信します。一方、(P48) 2030年には、日本基督教団を始め、プロテスタント教団、教派のほとんどの教会の教会員の2/3が、75歳以上になるという厳しい高齢環境に置かれることを予測しています。従って、御霊による特別なリバイバル運動が起こ

らない限り、2030年になると、日本のクリスチャンは半分以上になる恐れもあります。最後になりましたが、こよような環境に置かれたことを踏まえて、誠に、恐縮ではございますが、天の父なる神様は、先に神様から呼び出された私たちが、特に、時間的に、経済的に、そして、何よりも知恵と霊的にも満ち溢れておられる皆様が、また、何年か経たない内に、そのような立場に置かれる皆様が、”私の杯は あふれています”と、自ら信仰告白することによって、神様は土浦めぐみ教会がこの地域の救いの箱舟として用いられることを期待していらっしゃると思います。アーメン。

(お祈り)

愛する天の父なる神様、私たちが持っている全ては神様から頂いたものです。私たちが、預かっている物が何物であれ、どのくらいの物であれ、終わりを迎えた時に、そのまま持つて行くことは、何方も出来ないことを良く知っています。願わくは、イエス・キリストに愛されて、患難の時代に、地域の救いの箱舟としての尊い働きに励んでおられる、土浦めぐみ教会の全ての兄弟姉妹たちが、最後まで、自分のからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として捧げられますようにお導き下さい。感謝して、救い主イエス・キリストの御名によって、お祈り致しました。アーメン。